

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 14日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520689

研究課題名（和文） 『小右記』註釈と平安時代データベースの作成

研究課題名（英文） Annotation of "Shoyu-ki" and Database for Heian Era Study

研究代表者

三橋 正 (MITSUHASHI TADASHI)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：10222324

研究成果の概要（和文）：

平安時代の代表的な漢文日記である藤原実資（957～1046）の『小右記』を同時代資料と比較しながら特に長和年間（1012～1017）を精読し、長和元年から同二年七月までの校本・書下し文・注釈を作成した。政務・儀式の執行に役立てるといふ撰関期以来の日記の役立て方を再現するため、記事に記号番号を付して部類的に読む方法を提唱し、その一例を「撰関期の立后関係記事」に示した。また、平安時代研究に必要な人名・官職・場所（地図）・年中行事の考証のデータベース化を進め、小右記講読会のホームページを作成して成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：

This Study has continued to read and annotate "Shoyu-ki" which was the most famous Heian noble's diary written in Japanese-style classical Chinese by Fujiwara-no Sanesuke(957-1046), comparing with other major diaries in the same age. Especially Chowa years(1012-1017) were focused and prepared to publish till July of 1013. These diaries were written in order to make use of affairs and rituals of the state, so each article should be numbered and categorized according to Heian bureaucratic adjustment. "Appointment of Empress in Heian Period" is one of the examples to compare different diary's articles of different ages. The database for Heian Era Study, which contains persons, official positions, locations(maps) and annual events, has been also open in the homepage of "Shoyu-ki Koudokukai".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：史料研究 古記録、日記、小右記、御堂関白記、左経記、権記、立后、部類、平安時代

1. 研究開始当初の背景

| 小右記講読会（現在の代表は三橋正）で、

20年にわたり藤原実資（957～1046）の日記『小右記』を精読し、長元四年（1031）条の書下し文・註釈を完成させ、2008年8月に『小右記註釈 長元四年』上・下を刊行した（黑板伸夫監修、三橋正編、発売は八木書店）。そこでは、古写本（伏見宮本）から原文と書下し文を作り、複数の日にわたって記されている多くの事柄を整理し、同時代の源経頼（985～1039）の日記『左経記』同年条の原文（底本は東山御文庫本）と書下し文を併収し、『日本紀略』の書下し文と両日記を対照できるようにした。また、記録独特の漢文体（変体漢文）を読むための時代固有の語彙・語法を活かした訓読（書下し文）の方法を案出、さらに人物・官職・場所などの考証、重要事項の解説、索引を付した。

本書出版後、各方面からこのような古記録の読解を継続・発展させ、そこで得られた成果をデータベース化して平安時代史研究の進展のために公開することが求められた。そこで、『小右記』の長和年間の註釈作業を継承するだけでなく、撰関期の古記録を総合的に検証でき、かつ平安時代データベースの作成作業を開始するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、平安時代の代表的な漢文日記である『小右記』の正確な読解と、他の同時代の資料との関連付け、及び平安時代の研究の基礎となるデータベースの作成を目指すものである。

『小右記』は、記主藤原実資の社会的地位（身分変化）を考慮して、四期に分けて読解すべきである。すなわち、実資が20歳代から40歳代前半までの官僚としての精勤ぶりが見られる第一期、小野宮家の当主として三条天皇と藤原道長との間に立って活躍・困惑する第二期、後一条天皇即位後の道長政権下で儀式執行の第一人者として重用された第三期、そして長元三年十一月に「免列宣旨」を受けて儀式・政務の指導的存在となった以降の第四期である。先に註釈を施した長元四年は第四期に相当するが、本研究においては、藤原道長が存在感を増していく三条天皇の時代に当たる第二期に特に焦点をあて、主に『御堂関白記』と比較しながら註釈作業を進める。

単なる一史料の註釈ではなく、平安時代全体を視野に入れ、儀式については、同じ藤原実資の『小野宮年中行事』はもちろん、同時代の儀式書（『九条年中行事』『西宮記』『北山抄』『江家次第』など）との関連を精密に調査し、各記事の解釈と結びつけながら精密な解説を施す。人物については『平安人名辞典』、官職・身分については『官職要解』などの解説や『公卿補任』などの補任史料があ

り、本書の考証でもそれらを参照して同時代の解読に必要な情報を融合させ、時代ごとの人間関係を総合的に把握する。場所については、各解説と地図とを有機的に結びつけ、儀式における各人の移動を明示する。日記の各記事は、項目にインデックス（記号番号）を付し、それぞれの考証と本文編の註釈が相互参照できるようにする。これらを総合化した註釈とデータベースは紙面上では限界があるので、ウェブ上で発展させることを目指した。

3. 研究の方法

『小右記』の書下し文・註釈や諸考証の作成は、申請者が代表をつとめる小右記講読会で進めてきた作業であり、基本的にはそれを継続した。本講読会には現在、平安時代を専門とする研究者・大学院生が約80名所属する、約月2回の例会と春休みや夏休みを利用した集中合宿を開催している。

講読会の中心メンバーが『小右記』『左経記』などの写本の調査をし、必要な写真版を入手した。これをもとに従来の活字本を見直し、書下し文作成の土代となる校本を作成した。

例会では、校本の再検討と書下し文・註釈の作成を進めているが、本研究助成の期間内では、『小右記』の中でも特に注目されている第二期の長和年間について、厳密な読解を試み、同時代の『御堂関白記』などと比較考察をした註釈書の出版を目指した。具体的には、史料の分担を決めて参加メンバーに註釈を作成してもらい、それを基に検討を繰り返した。

例会の他に設けられた検討の作業では、古写本の校合と校本の作成、古記録にふさわしい書下し文の作成、註釈の統合、解説の作成などを行ない、長和元年条の出版に向けた準備をしている。

平成21年度は二松学舎大学大学院の日本漢文プロジェクトにおいて集中講義を担当して『左経記』治安二年条を講読した。平成22年度にはイギリスのロンドン大学アジアアフリカ学院（SOAS）で計22回、平成23年度には京都の池坊短期大学で夏・冬2回（計5日間）の講読会を開催し、それぞれ、第一期の天元五年条、第三期の万寿元年条を読んだ。

ホームページを作成し、そこでデータベースや研究成果を公表するだけでなく、仮想研究室としてインターネットを利用した共同作業を進めた。これにより、それまで平安時代史の専門家に限定されていた漢文日記（古記録）の情報が、国文学や他の時代の研究者、さらには国内外の関連書分野の研究者・学生にも活用されることになり、広範囲な連携のもとに多角的な検証が可能となった。

4. 研究成果

『小右記』については、四つに分けた各時期の最も特徴ある年の記事の校本・書下し文・註釈を作成する作業を並行して進めた。特に、第二期の長和年間の記事は、『御堂関白記』と比較をしながら考証し、従来の註釈を訂正すべき部分も散見された。これらの成果を更に精緻なものにして、長和元年と二年の註釈を出版する準備を進めている。第三期については、道長が法成寺の供養を行なった治安二年（1022）に注目し、その記事を『左経記』と比較しながら読解し、宮内庁・神宮文庫などの調査をもとに、その成果の一部を『左経記』治安二年条書下し文』として公開した。

撰関期の古記録資料全体を視野に入れた儀式研究にも力点を置いた。『小右記』だけでなく、同時代の『権記』『御堂関白記』『左経記』などの記事に記号番号を付し、それらを『小記目録』『日本紀略』『公卿補任』などと対比できる方式を完成させ、その上で同一の儀式・事項について、異なる年次の日記記事を並行して読めるようにした。これは政務・儀式の執行に役立てるといふ撰関期以来の「古記録文化」の精神に則った「部類」的な読み方で、これによって、次第など儀式書との共通点と年次ごとの相違点（問題点）が明確になり、より当時の関心に即した正確な読み方ができ、書写の誤りや本文・目録の欠落部分なども検証できた。「撰関期の立后関係記事」はこの方法による成果の一部で、さらに続編の公開を計画している。

平安時代データベースは「小右記講読会」のホームページを開設して公開している。

<http://saneyori.lc.meisei-u.ac.jp/>

本ホームページは、研究協力者と情報交換ができる仮想研究室の役割も持ち、『小右記』註釈作成作業と連携させている。仮想研究室へのアクセスはアカウントを得た研究者に限られているが、2008年に刊行した『小右記註釈 長元四年』の付録として作成した人名・官職・場所・年中行事に関する考証が検索できるようになっている。誰もがアクセスできるオープンスペースにおいては、『小右記』『左経記』など平安時代の古記録の概説や本研究で得られた新しい研究成果、内裏図・大内裏図・平安京図・上東門院（土御門第）図・小野宮第図などが閲覧できるようになっている。さらに、『小記目録』を補完する形で『小右記』および『御堂関白記』『権記』『左経記』の全条文にインデックス（記号番号）を付け、それらを他史料と関連づけて「部類」的な史料集成ができるように公開する予定である。また、人物考証については官職考証や

補任史料と、場所考証については地図と瞬時に比較できるようにする計画である。

これまでの『小右記』を中心にした古記録研究により、日記は単に付けられて保存されていたのではなく、筆写されながら活用され続けてきたことに真の意義があったことが明らかになった。それは「古記録文化」と呼ぶべきもので、前近代における日本社会の知の体系を作り出していた。外部研究者とも連携できる、より高度なシステムを構築すべく、検討を重ねた。具体的には、古記録（A）を書写する際に見出し（B）を付け、それに基づく目録（C）を活用して、『日本紀略』『本朝世紀』などの編年資料（D）や部類（E）が作成され、さらに諸知識（故実）を集成した故実書（F）や人物比定に必要な補任（G）や系図（H）が成立した。近世における内裏図・大内裏図の復元など歴史地図（I）の作成や、神社・寺院などにおける諸資料（J）の集成にもつながった。

現代の研究者もこのような知の体系を理解した上で古記録を用いなければならないが、それを正確に読みこなすためには、同時代の複数の古記録（A）の関連記事について、本文を校本 {a} として校異 {b} と共に確定し、それに基づく書下し文 {c} と註釈 {d} を作成するだけでなく、見出し（B）を活用しながら番号 {e} を付けて整理し、それを編年資料（D）との関係で年表 {f} にまとめ、政務・儀式・事件などについては部類（E）・儀式書（F）などを用いた解説 {g} を書き、官職によって示される登場人物は補任（G）や系図（H）との関係を人物考証 {h} で明らかにし、建物などの場所については地図（I）上に位置付けるなどの作業が必用になる。

現在の歴史研究者による古記録の註釈作業は専門とする時代ごとに進められているが、大学のゼミや有志の研究会によるものが多く、そこで検討された内容は（人物の比定など）非常に重要なものがありながら、ほとんどが公開されずに埋もれている。それらを世界共有の財産とするためにも、統一的なフォーマットを作り出すことが求められ、現在、明星大学情報学部の矢吹道朗・尼岡利崇両教授とシステムの構築を模索している。

本研究において新たな註釈書を制作していく過程で古記録研究の研究手法も模索され、見出し（B）・目録（C）によって全体像を把握するだけでなく、同一事項（年中行事ならば同日時）に関連する条文を一年ごとではなく、すべての年、さらに他の古記録や部類（D）と合わせて読み、総合した解説（研究）

を発表する方法が採用されている。この部類的読解方法は平安時代の古記録だけでなく、六国史の記事や中世・近世の諸資料を総合的に検証しなければならない。時代を超えた古記録研究の重要性に共鳴した歴史研究者が集まって「古記録文化」の解明を進め、国内外における教育・普及を視野に入れながら、コンピュータ情報処理の専門化の力を借りて理想的なデータベースを作成することは、日本研究のさらなる発展を可能にするであろう。

本研究期間において、平安時代の漢文日記（古記録）の研究方法を内外に広める活動も行った。平成21年度には二松学舎大学大学院の日本漢文プロジェクトにおける集中講義で『左経記』治安二年条、平成22年度にはロンドン大学アジアアフリカ研究学院（SOAS）の漢文セミナーにて『小右記』天元元年条、平成23年度には京都の池坊短期大学で『小右記』万寿元年条を取り上げ、古記録の読解方法を指導した。国内外における日本研究者を育成するため、今後もこのような活動が継続したい。さらに、国際日本文化研究センターの共同研究「日記の総合的研究」にて「古記録の書写と活用—古記録文化を理解するために—」について発表し、日記の書写形態と首書の関係から「古記録文化」の実態について発表した。今後も内外の学会・研究会などで、平安時代に形成された「古記録文化」の意義について明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 三橋正、神祇信仰の展開、荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編『日本思想史講座』1「古代」、ペリカン社、2012年4月20日、117-213
- ② 三橋正、撰関期の立后関係記事—『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向け—、明星大学研究紀要人文学部日本文化学科、査読有、20号、2012年3月、99-158、
➤ http://repository.meisei-u.ac.jp/kiyo_nichibunISSN13444387-no020.html
- ③ 三橋正、『左経記』治安二年条書下し文、明星大学日本文化学部言語文化学科紀要、査読有、18号、2012年3月、51-68、
➤ http://saneyori.lc.meisei-u.ac.jp/fw.php?path=result&page=sakeiki_ca2_k

〔学会発表〕（計3件）

- ① 三橋正、古記録の書写と活用—古記録文化を理解するために—、国際日本文化研究センター共同研究・日記の総合的研究、2011年12月18日、国際日本文化研究センター
- ② 三橋正、触穢規定の成立と密教教典、日本思想史学会、2011年10月30日、学習院大学
- ③ 三橋正、On annotating a Heian noble's diary and syncretic religions texts、ロンドン大学アジアアフリカ研究学院（SOAS）JRC Lecture、2010年6月2日、ロンドン大学アジアアフリカ学院

〔その他〕

ホームページ等

<http://saneyori.lc.meisei-u.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三橋 正 (MITSUHASHI TADASHI)
明星大学・人文学部・教授
研究者番号：10222324

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし